

題である。

鈴木宏昭

### 算数の教授—学習について

従来は下位スキルの漸進的積み上げ説や piaget 等の発達段階説に基づくものが支配的であった。しかし子どもは良くも悪くも文化的環境の中で生活しており、そこから様々な知識を獲得している。その中には算数で学習することと内容的に重なるものもあり、そのような知識が算数の問題解決に何らかの形で干渉してくることは十分に考えられる。

算数の問題の中で、子どもが特に間違いやすいものの1つとして溶液の混合算がある。そこで、「50%のオレンジジュース 250g と 100%のオレンジジュース1000g をまぜると何%のオレンジジュースができますか」という問題を用いて調査を行ったところ、 $50+100=150\%$ 、 $(50+100) \div 2 = 75\%$  という誤答がみられた。このような誤答原因をさぐるため、混合溶液の性質について子ども

もが生活上どのような知識を獲得しているのかについての実験を行った。その結果、前者は混合溶液がもとの2つの溶液よりも濃いと考えており、後者は混合溶液のこさはもとの2つの溶液のこさの中間にあるという知識をもっていることがわかった。さらにプロトコルの分析を行った結果、このような生活的知識は解決過程において、答えの大まかな予想をたてたり、答えをチェックしたり、計算の結果と予想との差をうめるために演算子を選択するなど、きわめて重要かつ多様な役割を担っていることがわかった。

これらの結果から、たとえ誤答をする子どもであっても、計算の結果と既有知識との間に整合性を求めていることがわかる。従って教授についても、生活的知識を考慮に入れた計画を考える必要があるだろう。特に、「深い理解」ということを考える時、算数の手続や答えが自分の生活的知識にてらして納得でき、生活の場面での現象が算数の知識によってより明確になるということがぜひとも必要なのではないだろうか。

## 自主シンポジウムⅡ：「日本の教育心理学を考える」

オーガナイザー	波多野 誼余夫 (独協大学)
司 会	無 藤 隆 (聖心女子大学)
提 案 者	山 下 恒 男 (茨城大学)
〃	山 下 栄 一 (関西大学)
〃	横 山 浩 司 (和光大学)
討 論 者	乾 孝 (法政大学)
〃	長 島 貞 夫 (埼玉大学)
〃	小 嶋 秀 夫 (名古屋大学)

### 企画趣旨

本シンポジウムは、従来の日本の教育心理学のあり方を批判的に検討し、かつ、より望ましい姿を模索するためのものである。具体的には、1) これまでの教育心理学の果たしてきた社会的役割を吟味すること、2) 「制度化された」(教育)心理学の研究法論を再検討すること、の2つを柱としてこの作業をすすめていく。以下では、前半では主として歴史的な検討、後半ではそれを受けて現状批判を行っていきたい。

まず、山下恒男氏が歴史的な検討と問題提起を行い、乾、長島両氏がそれに対してコメントをする。

### 山下恒男

現在の教育心理学の性格として、体系化された科学への志向と教育現場からの要請に答えるという面とがある。後者に関して、その有効性への批判が伝統的にあるが、妥当であろうか。むしろ、問題は、誰にとってどういう意味において役立っているかであり、社会的にマイナスであるという可能性である。歴史的に検討するならば、教育心理学は日本の近代化にともなってそれに奉仕するために生まれ発展してきたのだ。その意味での教育心理学の役割は、1つには、技術学——心理テスト、評価など——に現われ、もう1つには、人間観、児童観を含めたイデオロギーの面に現われる。この後者の面については、特に、昭和の戦時体制化に著しいものがあった。そして、これらについて、“高師・文理大”の流れの果たしてきた役割は大きなものがある。

具体的な例として、榎崎浅太郎、野島忠太郎などの著書、戦争中の「教育心理学」「錬成心理学」などの本、「教育心理学研究」の後書き、田中寛一らによる「東洋諸民族の知能に関する比較研究」などがあげられる。

(詳しくは、山下恒男「日本教育心理学」明治図書を参照。)。これらはいずれも日本の昭和期におけるファシズム体制を何らかの形でイデオロギー的に擁護するものと見なすことができる。

では、これらの傾向はその当時に他の心理学者たちによってどう受けとられていたものであろうか。また、批判勢力がなかった訳ではない。例えば、宗谷礼文(1933)によるパンフレット(これは仮名である)、教科研のグループなど。この質はどのようなものであり、今日までどう継承されてきたのであろうか。さらにまた、戦後、教育心理学者たちは“民主主義”にそのまま乗りうつって転生をはかった。どういうことで可能だったか。そして、このようにして、戦前から戦後そして今日へと同じ流れ・体質が続いているのであり、戦前の話は今日決して無縁のものではないのではないか。

### 乾 孝

戦前、教科研、保問研ができたときに、そこでいう“科学”には社会科学も入っていた。つまり、社会の変革を目指すものであった。保問研もまた、保育現場を“問題”として見直すということであり、変革を考えていたのである。戦後になって、アメリカの教育心理学が導入がなされるようになった。そのアメリカ流の心理学に対し必ずしも異和感はなかったが、むしろ“近親憎悪”、“自己嫌悪を感じた。そこで、矢川徳光氏「ソビエト教育論」の後をついていった。そして、保問研を再開した。保問研では、児童心理学を疑う所から始めようとした。“発達段階”を信じずに、教育者としての見識から、目の前の子どもを問い正すのである。他方、心理学に対しては批判的であった。

要するに、心理学者は、発達の現実をつかんで、それをふまえて体制を変革する動きに1つの資料を与えることはできよう。大事なことは歴史的な視点をもつことである。

### 長島貞夫

文理大に1940年に入学して、衝激を受けたのは檜崎の講義であった。そこで必ず宮城揺拝をさせられたのである。この人の著書「日本教育的心理学」の巻末には、ファシズム的な国家哲学が述べてある。また、「教育心理研究」には、いくつか国家主義的な論文が出ていた。また、1940年頃の「教育心理研究」の編集後記では武政太郎が国家主義的な発言をしている。この人の本来の著作はアカデミックなのであるが、編集後記では人が変わったようになった。小野島右左雄はゲシュタルト心理学者として秀れた人であったが、1937年の著作で“天皇の赤子”たることの説明をゲシュタルトを用いて行っている。この説明は他の心理学者にとって1つのモデルとなった。1943年の「錬成心理学」は、国民学校を心理学的に合理化している。

これらの例を通してわかるのは、心理学者がいかに歴史、社会を知らないかである。本当の“知識人”ではないのだ。今はどうか。今も全く同じである。心理学はそれ自体だけでは、自分自身の人格形成に役立たないものらしい。

以上、3氏の発言から、教育心理学が歴史的に日本の近代化のための学として成立してきたこと、その過程でファシズム体制にある種の貢献をしてきたこと、その体質は今日無縁ではないことがわかる。そこで、次に、横山氏の発言から今日での問題へと比重を移して議論する。(山下栄一氏は事情により欠席した。発表論文集に提案要旨が出ているので参照してほしい。)

### 横山浩司

日本の近代全体の中で、教育心理学は、どういう仕掛けで、ある一貫したものをもちながらどう生き抜いてきたのか。原理的に考えたい。日本近代の教育を考えると、本来あり得べき所の民衆の“自己教育欲求”が“被教育欲求”に変質させられ、民衆支配の道具としての教育制度になったと見なすことができる。その変質において心理学が入りこんだ。それが可能であったのは心理学の側に対応した仕掛けがあったからだ。それは要するに“個体主義”的な考えである。人間の心理現象について内容を捨象し、働きだけについて見る。その働きをになっているものが個人内部の心理装置である。内容の捨象により、現実の社会、歴史、生活のあり方もまた捨象されていく。このことによりどのような社会でも一般的に役立つ面と、しかし現実の社会・教育には通用しないという面とが並行的に出てくる。では中身を規制していくものは何か。それは道徳であり、“御時勢”が変わると変わる(後書きを変える)ようなものである。ここでは、心理機能と道徳とが内的必然性なくつながらている。そこで、例えば、戦後では、能力・学力と民主主義的道徳とが結びつくことになる。このような心理学側の仕掛けは近代日本の国家の仕掛けと連動したものである。すなわち、分断された人間を人的資源として、管理の対象とするというものである。

このような“パラダイム”を根底的に転換するにはどうしたらよいのか。第1に、個体主義を乗り越えなければならぬ。これは、前近代的な共同体をモデルとしてではない。個体の分断への自覚を通して、どのように他と結合・共同化する契機としうるかである。第2に、生活の中で人間がどのように生きているかをつかまえていく方向。第3に、発達を“完態”への近づきとしてではなく、個の成長のサイクルを関係そのものの発達のサ

イクルへとどのように発展していけるのかという点からとらえる。

要するに、教育心理学を広げていくべきなのだ。中にいながら外へどうやって出ていくのかということだ。その際、社会・歴史を考えていく。そのことにより、心理学の中に単純にとどまることはできず、枠組を押し広げていかざるをえないであろう。

### 山下恒男

歴史的な批判に対して、戦前のことだから触れるに及ばない、それなりの時代の事情があったのだという弁明があろう。しかし、それは結局、被害者としての語り方であるし、職域が狭って困るという言い訳にすぎない。

研究者としての意識性を問題とすべきだ。リベラルな立場をとっても、それは心理学の外のものとなっている。パラダイム転換を引き起こそうとしても、どういふ場でのどういふことを契機としたかが問題である。単なる研究者としてのその枠内での議論では転換は生じない。そのきっかけとは、自分たちが今まで知らなかった世界に触れることではないか。心理学では研究者の中立性意識が強く、“特権”的である。想定されている子ども・親において、“される側”の意味が抜け落ちていく。その意味でも、抵抗を感じる言葉・人・生活に出会うことが必要ではないか。

### 小嶋秀夫

“discipline”としての教育心理学を大事にしたいと考えている。そのため、disciplineを維持し、発展させることに努めている。discipline内部においては、「心理学がわかっているかどうか」という基準で学生を評価し、教育している。また、研究も自分にとって面白く、他の人も面白がってもらえるようなものにしたいと努めている。外部的には、多くの現場や他の学問領域の人々からの相談にのっている。その場合、問題なのは、データを十分にもっていないことが多いことだ。その意味で、心理学は外から問われているように思う。だから、心理学は、他の学問と協力して、問題中心のチームを組んでこれから研究していくべきであろう。

このような立場から、これまでの議論を考えてみる。山下氏は、研究・実践をやめて、批判を徹しよ、と言っているように見える。しかし、それは何を生み出そうとするためなのか。それがはっきりすれば、協力もできる。横山氏の指摘にある、現実の問題について、考えていない訳ではない。“関係性”といったことについても考えようとしている。確かに、内容あるいは現実での目標を無視している研究は少なくない。しかし、教育心理学は

本来そうではない。広い意味での規範科学であり、“何を”を考えざるをえないのだ。

### 乾 孝

批判側において名指しの批判は確かになかった。それは誤りであったと思う。民科心理学部会の場合、多くの人を仲間に入れることを考えていた。「児童心理学」の本の場合でも、政治的配慮が全くない訳ではなかった。

今日の教育心理学に対しての警戒を述べておきたい。横山氏の言うように、性能機械の追求で内容抜きになっている。そこから、児童・人間観・歴史観の歪みが生じてきて、危険なイデオロギーを広め、定着させるのに役立っている。研究者は、日常の世界に降りてきて、自分を暗箱に入れずに、平々凡々の子どもたちと同じ床に立つことだ。相互変革の場に身を置くべきだ。そうすれば、自ずと、パラダイムの転換をせざるをえないだろう。そもそも、人間を研究する心理学には元々歴史が入っているのだ。そこから、ことさら逃げ出したことから人間観の歪みが始まっている。

### 長島貞夫

戦前、戦時中、心理学者は戦争の性格を見通せなかった。学生であった自分たちも抵抗する方法が見出せなかったし、いつ召集が来るかわからないという状況で、納得いくまで勉強しようと考えた。戦後になって、戦時下での先生たちを“反面教師”として再びそのような行動をとりたくないというのが願いであったし、今でもそうだ。

今日、例えば、“落ちこぼれ”の問題が心理学的に論じられるときに、教育内容、指導要領の問題がとりあげられない。しかし、それは全くおかしい。前提をくずし、批判するのだからなければならない。学ぶ側に立った教育心理学が必要なのだし、人権といった問題を正面から取りあげることが必要なのだ。

以上のような一連の発言の後、フロアーからの質問・コメントを受け、それに対し改めて提案者・討論者が答えた。その中でいくつか重要な論点が出されたが、1つだけあげておきたい。篠原睦治氏（和光大学）は次のような指摘をしている。

戦前における心理学がファシズムに寄与したというが、実効はなかったのではないか。むしろ、ファシズムに寄与する装いを取りながら、戦後の近代的心理学を準備したのではないか。その後、アメリカ心理学、ソビエト心理学が導入されてきたのだが、それと合体して、今日の人間管理学としての近代心理学を発展させてきたの

ではないか。

全体をまとめることは不可能に近いが、なおかつ、基調となる考えを抜き出せば、次のようになるかもしれない。すなわち、戦前、戦中において、教育心理学はイデオロギー的に国家主義的体制に何らかの役割を果たした。戦後になってそのイデオロギーは民主主義へと容易に移ることができた。その点では非連続だが、他方、近代科学的な実証性、技術的側面では（戦中の一時期を除いて）むしろ連続している。しかし、イデオロギー的にも、それが外側の「道徳」として心理学と接合されるといふ構造においては同一である。個体主義に支えられた

所の構造が根底にあるのだ。もちろん、戦後になって心理学がより多面的になり、それなりに豊かになったし、また、民主主義的道徳がファシズムのそれよりましなことも明らかだ。しかし、そのことは、今日、上に指摘した問題が存在しないことを意味するのではない。アカデミズムの世界において、問題が見えにくくなっていることを意味するにすぎないのだ。横山氏の指摘するように、教育心理学の枠組をいろいろな形で押しひろげていく必要がある。そのためにも、我々はいっと日本の近代の歴史について、そしてそれに伴っての（教育）心理学の歴史を知る必要がある。（まとめ：無藤 隆）

## 自主シンポジウムⅢ：「乳児保育」に関する発達研究の 理論と方法をめぐって〔Ⅲ〕

——保育にかかわる大人たちのつながりと子どもの発達——

企画者 金田利子（静岡大学）  
提案者 近藤直子（日本福祉大学）  
          諏訪きぬ（鶴川女子短期大学）  
          大戸美也子（玉成保育専門学校）  
指定討論者 横山浩司（和光大学）

金田利子

### 企画主旨

今回は、このテーマでの3回目のシンポジウムである。1回目は、「乳児保育」について種々論議のある中で、乳児が人間の子として育つ必要最低限の条件は何かという角度から討論した。その結果、理論的背景や方法論は異なっても、「人間関係」「物的環境」「指導」の3点が不可欠要素として確認された。2回目では、その中からとりわけ「人間関係」についてとりあげ、より密着した個人的感情を伴う関係（アタッチメント、特異的感情）と社会的感情を伴う社会的関係というような、関係の内容上の質と、子ども—大人の関係、子ども—子どもの関係というような対象による関係の質、という二面から、乳児期の人間関係の発達に及ぼす意味について討論した。また、研究方法の点からも、実験室的研究とフィールド研究との関連について意見を交換し、2つの質の異なる関係と、子ども—大人の関係と子ども—子どもの関係の両者が不可欠であること、さらに、各種の関係の発生的根源が同じなのか異なるか等のきめこまかな研究

が課題になるのではないかということ、シンポジウム参加者の中で確認した。また、フィールドと実験室的研究の両者が相互に関連していることはすでにわかってきているが、フィールドからの課題を実験室的に研究した際、フィールドに戻す時に新たな方法論が必要ではないかという討議がなされた。

今回（3回目）は、2回目の成果をそのまま深めるのではなく、先の「不可欠三要素」からいうと「指導」にあたる、大人のあり方と子どもの発達との関連をとらえることにした。乳児保育所は保育者にとっては職場であり、職場の人間関係が保育を支えている。したがって、乳児集団保育の中で乳児に意欲がない場合、母子分離よりも、職場の管理的な人間関係が原因になっているかもしれない。家庭でも、家族関係が崩壊状況にある場合、父母の手元で育てばよいとはいえない。

子どもと大人との関係は、対等であっても、一方が大人であれば何らかの指導的な意味をもつ。そして、そういう子どもと大人の関係は、大人のつながりのあり方に規定される。こうした角度から、乳児保育の実際ともかわらせつつ、大人たちのつながりのあり方と子どもの発達とがどうかかわるかを、今回の主題とした。

近藤直子

### 発達研究の視点から

1. 乳児期から幼児期への移行過程における "おと

cific knowledge. As a candidate, we proposed a process of what Sayeki called "signification" (finding significances) of the current knowledge in people's everyday understandings.

Ueno demonstrated how the domain-specificity usually observed in Wason's "four-card problem" could be overcome by introducing particular "point of view" of the agent engaging in the problem situation. He also showed that the successful "point of view" would be easily introduced by use of proper verbs in explaining the problem situation.

Ohtsuka represented the experimental study showing how children acquired a higher-order schema in arithmetic word problems. He also presented some evidence that children could be instructed to use the schema to obtain the generality of the principle they learned.

Suzuki presented his study of "orange-juice mixing problem" in which even adults often misunderstood the density of mixed juice. He mentioned that people's familiarity in everyday activities in liquid mixing problems was highly correlated with the performances.

Namba showed that undergraduates failed to un-

derstand the economic laws on how the price of commodity should be determined, even for very familiar examples in everyday life. He found that crucial "bugs" in economic understanding existed in people's misconception that the "value" of commodity would only be associated with its price.

Kubo presented her studies on people's capability of empathically understand other person's feelings. She categorized three levels of empathic understanding: (1) simple labelling in emotive terms, (2) recollection of similar experiences of their own, and (3) construction and discovery of new emotive world which could be experienced freshly by the understander.

Finally Sayeki summarized these studies in his framework of signification, i. e., the assumption that people have dual processes of finding procedures to solve immediate problems and of trying to make the situation sensible by incorporating the current experience with their previous experiences in order to find significances and value of knowing and assessing the possibility of using the knowledge, and so on.

## VOLUNTARILY ORGANIZED SYMPOSIUM II

### RECONSIDERING EDUCATIONAL PSYCHOLOGY OF JAPAN

Organizer :	Giyoo Hatano	(Dokkyo University)
Chairperson :	Takashi Muto	(University of the Sacred Heart)
Speakers :	Tsuneo Yamashita	(Ibaragi University)
	Eiichi Yamashita	(Kansai University)
	Kooji Yokoyama	(Wakoo University)
Discussants :	Takashi Inui	(Hosei University)
	Sadao Nagashima	(Saitama University)
	Hideo Kojima	(Nagoya University)

This symposium critically examined Japanese educational psychology from a historical perspective putting an emphasis on more adequate forms of study. Social roles past educational psychology played were first analyzed followed by a positive criticism of research methodologies of "institutionalized" educational psychology. Historically, prewar and wartime educational psychology, influenced the ideology on

state fascism. After the war, educational psychologists favored democracy. They changed their ideology, retaining the same basic "paradigm", that is, a positivistic stance taking psychological devices within the individual as theoretical units. Such paradigm disregarded social and historical contexts embedding individuals. Efforts should be made to try to break such rigid, academic framework from a

historical and critical perspective.

## VOLUNTARILY ORGANIZED SYMPOSIUM III

### THEORIES AND METHODS ON THE DEVELOPMENTAL STUDY OF "INFANT EDUCATION" [III]

Organizer and Chairman : Toshiko Kaneda (Shizuoka University)

Speakers : Naoko Kondo (Japan University of Social Welfare)

Kinu Suwa (Tsurukawa Women's Junior College)

Miyako Oto (Gyokusei Training School of Early Childhood Education)

Discussant : Koji Yokoyama (Wako University)

This series of symposia started two years ago. At the first conference (1980) three essential elements were found for the development of early infants : (1) material environment, (2) human relations among infants, and (3) way of leading. The second session (1981) discussed the method of approach to the problem of relations among infants as cited above.

The third session (held in 1982) took up the problem of leading, and discussed the roles and relations of adults as leaders of infants. Three reporters proposed their ideas on the subject from each of their own viewpoints.

Kondo reported on the 'leading' of infants from babyhood to infancy (from one to two years of age). Kondo said that the infants' need of the presence of adults depends on what developmental process and what part of the stream of life in a day they are in, and the proper relation between infants and adults are therefore important in the infants' daily life.

Suwa reported on the 'leading' of infants at nursery school. She put an emphasis on the relation of adults as leaders to infants shown in the interaction of teachers and infants at mealtime. Suwa said that in spite of the same ratio in number of teachers and infants, there is a large difference in the quality of "care" and "relation", and insisted on the significance of the quality of education and care at nursery

school.

Oto stressed the importance of establishing a system of consistent collaboration among care-takers in daycare setting, because a network of relationships, reciprocal in nature and mutually enhancing, give an impact on children's performance, i. e. the structure of children's play.

Yokoyama, panelist, opened the debate by pointing out : (1) the necessity of seeing the problem from the angle of an historical and social span ; (2) the necessity of changing socially systematized infant-care for a one based on a system of informal life ; (3) the necessity of defining, before discussion, the status of parents in infantcare.

The above debate resulted in the recognition of the following points : (1) the importance of improving a method on handling such problems on the basic study of span (scientific research of infant-caring, etc.) considering social and historical situation ; (2), (3) the importance of making space where infants could live socially supported but not controlled, for example a day nursery, a supporting system for parents ; (4) the importance of detecting advantages of group infantcare resulting in good influence among infants at the condition that an inter more than an individual relationship among children be more emphasized.